

キウイフルーツかいよう病の切除枝の被覆処理効果

かいよう病感染樹の部分切除処理や剪定枝は、病原菌が生存しているため、病原菌が飛散しないような取り扱いが必要である。
 しかし、労力やコストの問題等から園地外への持ち出しや埋設が困難なこともあるため、切除枝の適切な処理方法として被覆処理効果(PCRによる菌の検出率で評価)を検討した。

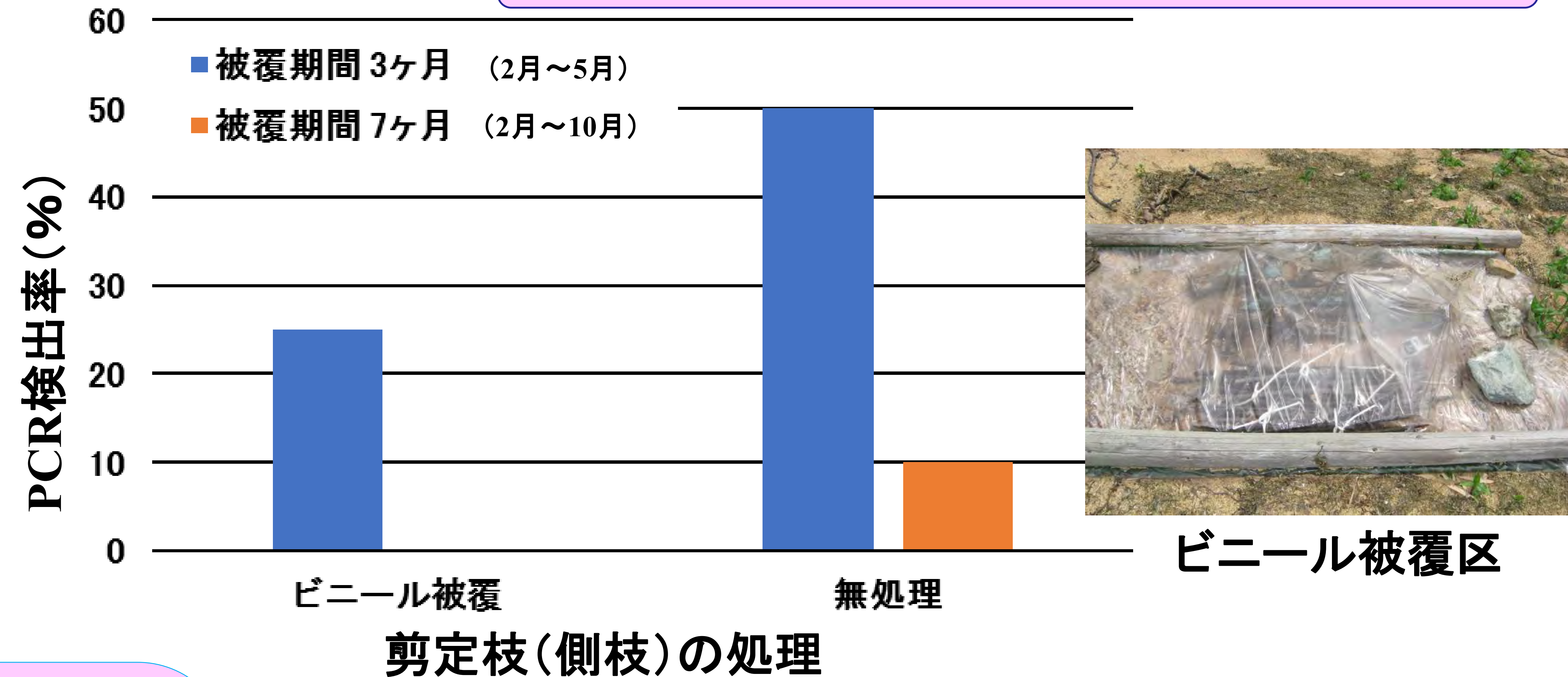
○被覆資材の検討

表 被覆期間中の内部温度

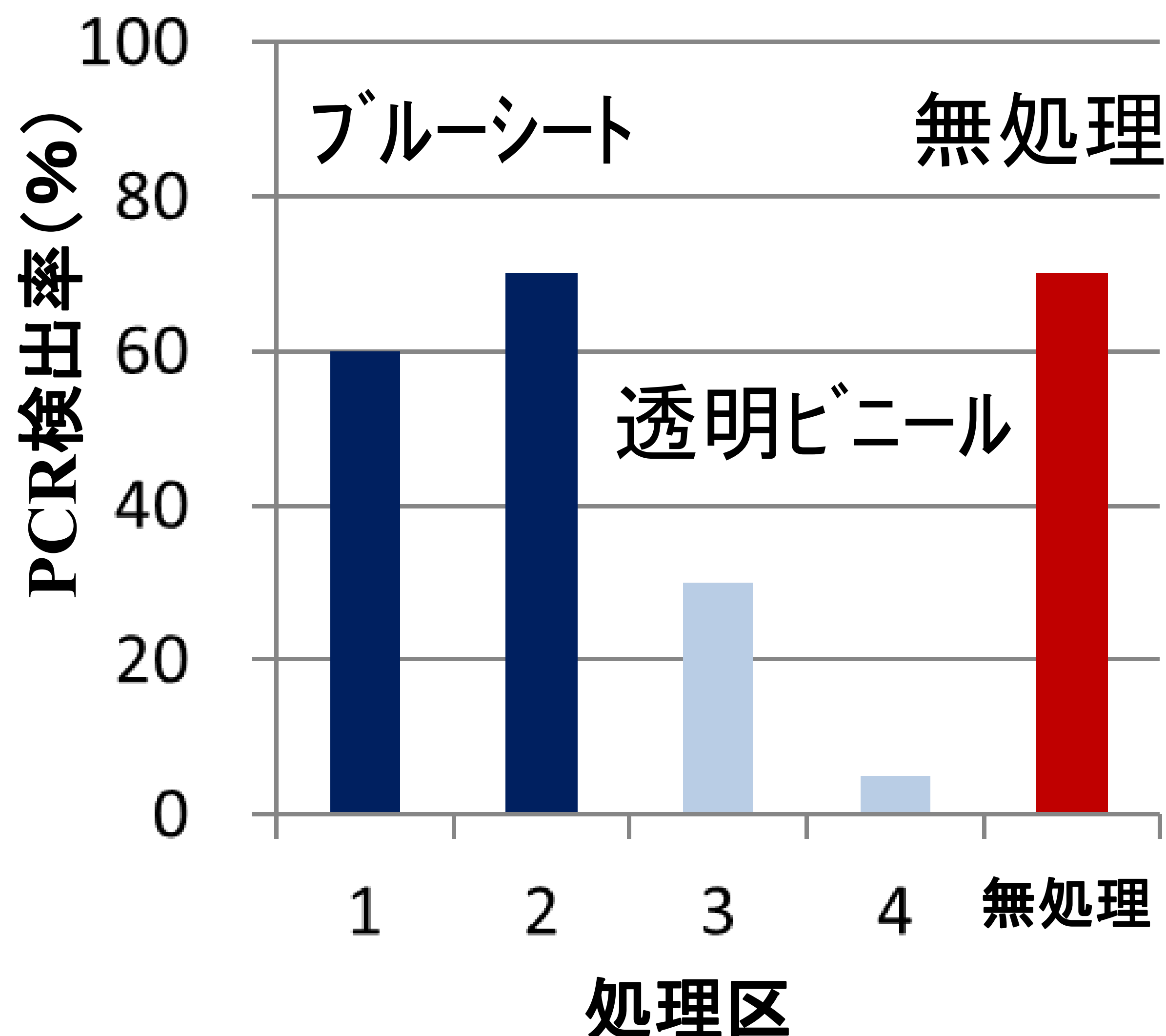
試験区	被覆資材	石灰処理	32℃以上の時間
1	ブルーシート	○	200 h r
2	ブルーシート	×	140 h r
3	透明ビニール	○	678 h r
4	透明ビニール	×	552 h r
5	無処理	×	-

1) 測定期間：28/3/9～6/22

○被覆期間の検討 被覆期間は長い方が菌の検出率が低下



○被覆処理による効果(5～9月)



透明ビニールの方が、かいよう病菌が死滅する32℃以上の保持時間が長い

↓
 ブルーシートよりも透明ビニールが良い
 石灰処理効果は不明

菌の生死を問わない評価であるが、剪定枝を長期被覆して高温処理することで、無処理と比較してかいよう病菌の検出率は低下傾向であった(菌の低減効果が見込める)
 被覆により、周囲へのかいよう病菌の飛散も防ぐことができる
 ⇒被覆処理は有効な方法であると考えられる